

## フランス18世紀の建築書における間取りの概念について

白井 秀和\*

### On the Notion of DISTRIBUTION in the French Architectural Books of the 18th Century

Hidekazu SHIRAI

(Received Feb. 28, 1997)

In this paper, I tried to make clear the notion of Distribution. This notion is originally derived from Vitruvius's *Distributio*, and in the Architectural thought, served as a key word. It marks the turning point from 17th century to 18th century. In other words, this notion also characterizes one of social changes in the "Ancient Regime".

#### はじめに

本稿で取り上げる「間取り」(distribution)の概念は、はるかに古代ローマの建築家ウィトルウィウスが建築の基本原則と規定した *distributio*、すなわち内在的原理 *decor* (ふさわしさ) に従う外在的原理と繋がるものである<sup>1)</sup>。間取りとは端的に言えば、数のあらかじめ決められた要素を配分すること、すなわち部屋割りのことである。この概念は、18世紀の代表的な建築理論家ジャック＝フランソワ・ブロンデル<sup>2)</sup>によって、従来の体面重視の家屋の造りから利便性もしくは実用性重視の家屋の造りへの大転回が推し進められたことで、建築理論史あるいは建築思潮史上、きわめて重要な意味をもっている。

本稿では、この大転回の中心的役割を果たした間取り *distribution* すなわちディストリビューションの概念を、それがもっとも大胆に現われたフランス18世紀の種々の建築書をとおしていくらか明らかにするものである。その際間取りの概念のみならず、この概念を支えた、あるいはこの概念に支えられた「快適性もしくは利便性」*commodité* の概念をも同時に少しく明らかにしてゆくことになる。

---

\* 環境設計工学科

間取りの概念は、先に述べた体面重視の家屋の造り、すなわち主として建物の内外の装飾や建物の規模に腐心した17世紀までの考え（これは公の思想といえよう）と、利便性重視の家屋の造り、すなわち主として建物内部での使い勝手のよさや安らぎや合理性に関心を向けはじめた18世紀以降の考え（これは一部私の思想といえよう）双方の歴史的なせめぎあいを証するものでもある。そうした意味で、本稿で扱う間取りの概念は、建築的空間の研究において、歴史的側面から大きな光を投げかけることになるといえよう。

### 1. 一般建築書における間取りの定義

間取り distribution なることば自体は、建築理論上は新しいことばではない。しかし17世紀までは、このことばは美学的な意味合いで使われていた。すなわち比例関係 proportion の適切さとか美しさとかいった概念に限定されて用いられていた。しかし、さまざまな意味でジャック＝フランソワ・ブロンデルの先駆的存在であったジェルマン・ボフランは、1745年に出版したその『建築書』のなかで、すでに次のように述べていた<sup>3)</sup>。

（間取りという）建築のこの分野は、利便のよさを目的としている。建築を取り巻くものすべてが、くつろぎをもってなされるべき建物の役割に合致したかたちで配置されなければ、利便がよいということとはできない。

しかし、さらにこのボフランにさきがけて、シャルル＝エティエンヌ・ブリザーは、その『現代建築あるいは万人のためのよく建てる術』（パリ、1728）のなかで、住居における利便のよさを、間取りの新しい性質として提示し、間取りの概念にはそれまでは単に必要性しか要求されてこなかったと述べていた<sup>4)</sup>。この時点ですでに、間取りは、一方では建物の持ち主の社会的ステータス明示の機能を果たすという、旧来の適合性の原理に従い、他方では建物のそれぞれの部屋を「それぞれに固有な用途に応じて」配置し出入口を設けるという、利便性や美しさの原理にも従わねばならないと考えられていたのであった<sup>5)</sup>。利便性すなわち利便のよさと間取りは、18世紀においてその密接な結びつきが重要視されることになったのである。すなわち、社会学者ノルベルト・エリアスのいう家屋をめぐる二つの価値——上流階層にとっての、自分がどのような身分に属しているかを家屋によって表現しなければならないという「家屋の威信価値」と、下流階層にとっての、均斉・耐久性・便利さ・経済性という「家屋の実用価値」——がともに要求されることになったのである<sup>6)</sup>。

しかしながら、この二つの価値は18世紀をすぎるところには、上流階層にとっても、「家屋の実用価値」が優勢を占めることになる。そのことは、「間取り」学を打ち立てたジャック＝フランソワ・ブロンデルが、間取りといういわば新しい術を建築の第一の目的と捉えたことから明らかである。今世紀初めにこのブロンデルの大部な著作『フランス建築』（1752-56）を再刊した、エコール・デ・ボザール教授ジュリアン・ガデは、この書の序文で次のように述べた<sup>7)</sup>。

17世紀にすでに、間取りの術は長足の進歩を遂げていた……しかし、もっとあとになってさまざまな間取りが建築家の第一の関心事となったことを思えば、（17世紀のこの進歩は）例外的なものであった。建築が人間的なもののすなわち実践的なものになったのは、まさしく、ブロンデル以降なのである。

それでは実際のところ、ブロンデルが間取りをどのように定義づけていたかを見てみよう。ブロンデルは、自らが開校した芸術学校の開講の辞を『建築を学ぶ必要性についての

論考』と銘打って、1754年に出版したが、そのなかで次のように間取りのことを述べている<sup>8)</sup>。

間取り。この用語は、建物の平面を構成するさまざまな部屋の振り分けを意味し、部屋の位置は、儀礼の間、社交の間、私用に使われる間といったさまざまな用途によって決められる。間取りは、建築の重要な部分のひとつであり、これによってわがフランス建築は、ここ三十年来、この建物の部分に関しての新しい技術をいわば創造したことで、非常に大きな名声を勝ち得ている。

ここに明確に表わされた、フランス建築が自ら創造した間取りの術によって大きな名声を勝ち得ているということばは、同時代のイギリスの著名な建築家ロバート・アダムらによっても、確かに認められているところである<sup>9)</sup>。周知のように18世紀のフランスは、ロココの隆盛によって室内空間に対する関心が著しく増大し、ひいては「閨房」boudoir というきわめて女性的な空間を創造するまでに到った<sup>10)</sup>。もちろんブロンデルは、こうしたロココ的な空間のみを指しているわけではないが、先に述べたボフランが、ロココの代表的な室内空間であるスーピース大公妃の楕円の間を設計していることなどを考えあわせれば、フランスのロココが、間取りの術が担った体面から利便性もしくは実用性への転回の役割に大いに寄与したことは否定できない。

しかしながら、18世紀前半ないしは半ばにおけるこうした間取りの捉え方、ことばを換えていえば間取りに対するフランス人の自負も、世紀後半にはフランスの主流の建築家によって批判されるようになる。その代表的な例が、クロード＝ニコラ・ルドゥーである。ルドゥーは大部なその著作『芸術、風俗、法制との関係の下に考察された建築』（1804）の序文（これは18世紀後半に書かれた）のなかで、フランスにおける間取りの欠点を述べている<sup>11)</sup>。

間取りについてあれこれと考えると、必然的に、間取りの発展を遅らせてきた既定の問題に行き当たってしまう。つまり、ある国では間取りについて十分な理解がされず、また別のある国では間取りによって与えられる自由が濫用されているのである。たとえば、イタリアでは、間取りの分割が大造りであり、すべてが見た目の効果を出すために犠牲にされ、フランスでは、この分割が細くなされすぎて、うんざりするほどであり、一部を欠いた階（中二階）にもっぱら集中して分割が行なわれているために、衛生面や利便性が損なわれ、われわれの能力を発揮することもなく、建築の度量の大きさが葬り去られてしまっている。

とはいえ、ルドゥーは間取りそのものの持つ意義は十分に認めている<sup>12)</sup>。

しかしながら、間取りのもつ創造的な力には、事にあたる前の方針を掘げたり、明確にしたりして、これらの方針のあれこれのなかで選択を行ない、焦点を絞って考えをまとめるための基本的な知識がある。……変化に富んだ間取りの数は、それこそ無限にあるのである。

そして、間取りを考える際には、あらゆる種類に及ぶ利便さの数々が、建物をつくる際の要求にできるだけ応えるように配慮しなければならないとする。ルドゥーもまた、間取りに対する関心があらゆる社会階層に伝播していることを認める。しかし、ルドゥーは、上流階層の人々においては、いまだ間取りの意味づけ、すなわち先のエリアスのことばでいえば、「家屋の実用価値」に対する理解がなされていないと批判する。そのことは、ルドゥー自身が設計した邸館建築において、その革新的なファサードとはまったく逆の旧来の間取りが見られることから明らかである。再びエリアスのことばを用いれば、「家屋の

威信価値」をいまだに重要視する貴族施主の意向に沿わねばならないひとりの建築家の実践上の苦悩を、そこに垣間見ることができるのである。

## 2. 建築辞典における間取りの定義

前節でわれわれは、ブロンデルを初めとした重要な建築家たちの著作をとおして、間取りの概念を捉えたのであるが、その一方で明確な概念定着を意図した辞典における間取りの定義がどのようなものであったかを知ることが、きわめて興味深い。ここでは、ダヴィレ、ル・ヴィルロワ、そしてもっとも重要なカトルメール・ド・カンシーの順に、彼らの著わした建築辞典の間取りの項を見てゆこう。

最初はシャルル＝オーギュスタン・ダヴィレによる『建築用語集』の1710年版である。

区分ということばは、かつては平面図の配分（間取り）を意味していた。しかし、このことばは今日では、ひとつの大きな屋敷のなかで同じ用途に使われる多くの部屋のことをいう。

どうもここからはたいした成果は得られそうにない。次にロラン・ル・ヴィルロワが1770年に刊行した『建築辞典』を見てみよう。

（間取りとは）ひとつの建物ないしはひとつの庭園が占めるべき土地を、その土地の目的や、建物ないしは庭園をつくらせる人物の視点に関連づけて利便よく理に適ったように分割することである。建築における、この本質的な部分には、天才と注意力と理性の力が要求される。というのも、機智や利便性や美しさや優美さや内外の装飾の合致がつねにしっかりと現われでていなければならないからである。

きわめて簡潔な言い回しであるが、この文章からは、間取りが建築の本質であるとの認識や、理性を行使して利便のよさと美しさ（つまり建築の三原理のうちの用と美）を表わすべきとの教訓が明確に打ちだされている。それに加えて、内外の装飾の合致(l'accord de la décoration intérieure avec l'extérieure)ということばにも注目しなければならない。実際のところ、装飾に限らず内外の合致は、間取りを考える際に重要な観点として定着していたのである。ブロンデルにおいてはこの内外とは、平面とファサードのことにほかならない。つまり18世紀の建築家は、美しいファサードを意図したものの利便のよさは無視してきた前世紀の建築家の立場とは異なった、正当な立場をとるべきことを、ブロンデルは説いていたのであった<sup>13)</sup>。この問題は、ブロンデル以降の建築家によく見られるものであり、われわれは、次に見るように、カトルメール・ド・カンシーによって引用されたル・カミュ・ド・メジエールの論考のなかに、この点についてのより先鋭な考えを見いだすことになる。もっとも、少しく先に見るように、ダヴィレが、ブロンデルにさきがけて、この問題を明確に捉えていたのではあるが。

いずれにしろ、エルブ＝ヴィダルも論ずるように<sup>14)</sup>、平面（すなわち内部）における利便のよさという新しい規則は、ファサード（すなわち外部）の構成という古典主義的な法則の適用を困難なものにしたことは確かである。内外の合致という問題は、間取りの術の進歩（すなわち内部の進歩）によって、より困難なものとなり、それゆえにこそ多くの建築家が声高に両者の合致を唱えたのだともいえよう。しかし、時代の流れは、間取りという内部空間に力点を置く方向へと当然のことながら向かっていった。内外の合致は、こうした動きによって崩されてゆく外部の構成を何とかもち直そうとした建築家の、ある種悲愴感の漂う理想であったのかもしれない。

さて、次は間取りの概念をもっとも徹底して説明したと考えられるカトルメール・ド・

カンシーである。カトルメール・ド・カンシーは、1801年に出版された『分野別百科全書・建築』の第二巻の項目「間取り」において、ル・カミュ・ド・メジエールやダヴィレの著作を引用しつつ、間取りが結局は、利便のよさ(commodité)という一点のみに関わるという考えを示した。しかもこの利便のよさも各国における慣習に支配されており、間取りについての普遍的な規則を確立することは不可能であると結論づける。先人の例にならって、フランスとりわけパリにおいて間取りの術が洗練されていることを認めつつも、それとてもパリにおいては大きな土地を得ることが困難であったという理由からそうだったにすぎないと断じる。さらには、建築家が建て主の個別の考えに従属したままの事態が続く限り、こうした間取りの規則はいつそう規定しにくいともいう。しかし、最低限の与件の存在は認め、ダヴィレが示した8つの格率を挙げることで、この間取りの項目を締めくくっている。長い引用にはなるが、史料的な意味でも重要と思われるので、以下にこのカトルメール・ド・カンシーの論考の全文を示すことにしよう<sup>15)</sup>。

#### 間取り 女性名詞

この用語は、ひとつの建造物の内部を形づくるいくつもの部屋の、分割と順序と配列を指す。

間取りは、市民建築、すなわち住居を衛生的で利便よくまた心地よいものとするところをとりわけ主眼としたこの建てる術の、もっとも重要な部分のひとつである。良好な間取りは、ひとつの建物が占有している場所を繁栄させるし、またこの建物に住む人々の楽しみを増大させ、さらには、建物の賃貸を大きく促進させる。

古代人の場合の間取りという分割は、われわれが正確な観念をもっとも捉えにくい分野のひとつである。個々の住居はその性質上、町々に起こった大混乱や大変動のあとには、決して存続するものではない。ヴェズヴィオ火山によって埋められた住居の発見がなければ、われわれは古代のいく人かの著述家たちによる常に曖昧で疑問の多い記述にのみ頼らざるをえなかったであろう。しかしながら、ポンペイで見いだされたきわめて保存状態のよいわずかの数の住居がとりわけ、内部の間取りについて説明を少しく与えてくれるのである。家のなかの生活に関わる慣習や慣例にこれほど基づいたものはほかにはない。

これらの住宅の平面図に特徴的なものは、きわめて単純でほとんど均一な間取りである(アパートマン、シャンブルの項を見よ)。しかしながら、ポンペイの別荘は例外と見なすべきである。なぜなら、そこでは、内部の装飾物や部屋の出入口や利便さの探求によって、この心地よさの分野が、町の場合でも田舎の場合でも、豊かな家主たちのものである住宅の数々に、かなり深く入り込んでいたと推測することができるからである。

現代の芸術家たちは、ティヴォリにあるハドリアヌス帝の別荘の平面図について行なわれた研究に倣って、こうした推測の正しさを認めている。実際のところ、ハドリアヌス帝の別荘では、きわめて巧みな技術で間取りを施された住戸(アパートマン)や、最高の技巧と最高に凝った装飾を用いて、ありとあらゆる利便のよさがしつらえられた浴室があり、さらには住む場所の気候や一日のおのおのの時間帯にきわめて適合したやり方で採光されたとても大きな部屋部屋や、すべての扉がひと続きになって

並んだ同一階の部屋部屋が見られるのである。結局のところこれらの形の一定しない遺跡においては、ローマ人たちが間取りの術と贅を尽くした利便のよさを、現代人の場合よりもおそらくは遥かに強く推し進めていたことを認めざるをえないのである。

しかしながら、現代のある建築家（すなわち、『建築の精華』を著わしたメジェール）は、これとは違った意見をもっている。彼は、小プリニウスがその二つの別荘についてわれわれに残した記述に基づいて、古代の間取りについて次のように語っている。

「（小プリニウスの言うには）ローマ人もギリシャ人も外部の装飾にすべてを捧げており、内部はまったく利便のよくないものであった。それぞれの部屋には何らの繋がりもなかった。外部の飾りつけが部屋の大きさを決めた。広大な歩廊間がこれらの古代の建物の中心をなしていた。プリニウスが自らの別荘について書き残した記述を見てみよう。〔その別荘である〕ラウレンティーネについての記述によれば、広大な領地や盛りだくさんの豪華さや溢れんばかりの壮麗さが見られるものの、個々の利便のよさについては何も得るところがない。ローマ人やギリシャ人は、場所の位置とか健康にもっとも好都合な向きとか楽しみとかだけを利用することができたのである。ここで言う楽しみとは、移り気な天候にもかかわらずさまざまな季節に応じた、純粹で穏やかな空気を享受するときに賢明な人々が味わうものを指している」。

「これによってわれわれは、さまざまに異なった状況に応じて、気候が与える目と精神とに快いものすべてを、建築において利用する術をもまた、学ぶことになる。大多数の部屋の場合、海の景色やざわめきさえも享受することもできた。庭園の奥に引き込んだ別の部屋では、かなり遠方からしかこのざわめきが聞こえず、それは一種のつぶやきのごときのものであった。海の景色も見えず、ざわめきも聞こえない部屋部屋では、大きな安堵感とこのうえなく優しい静けさとを享受できた。これらのさまざまに異なった状況においては、いくつもの住戸、いくつもの昼用の部屋と夜用の部屋、人々の集う大きな広間や宴会用の部屋、さらには家族や小人数の友人たちの集まるそれほど大きくはない別の部屋部屋があった。そこにはまた、いくつかの個室もあり、長い歩廊間を通して、ここで家の主人が、自らの家族から離れて勉強したりひとりで安らうことができたのである」。

「この全体は、盛りだくさんの豪華さや大きな豊かさや当を得ぬほどの贅沢な様を示している。おのおのの部屋の大きさ、広大さ、そして使い方がこのことを感じさせよう。実際のところ、ラウレンティーネというこの建造物の外面を考察すれば、そこでは正面の端から端までがおよそ170トワーズ〔1トワーズは、約1.95m〕あったと考えられる。あるいは240トワーズとも考えることさえできよう。（テュイルリー宮殿の場合は、170トワーズ。またヴェルサイユ宮殿の庭園側の場合は、220トワーズである）。この広さは、完璧な対称性を建物全体に与えるのに必要であった。しかし、この規模の大きさは何ら驚くにはあたらないものである。なぜなら、普通の宴会用広間の場合、奥行が10から11トワーズ、幅が6トワーズ少々あったからである。大きな中庭の場合には、30トワーズ×24トワーズ、そして円形の小さな中庭では、直径が12トワーズあったのである。プリニウス自身が公共建造物と比較するために挙げた歩廊間の大きさは、奥行45トワーズ、幅5トワーズであった。もうひとつの宴会用広間は12トワーズ×8トワーズであった。この広間に隣接する

部屋と球戯場はそれぞれ奥行12トワーズ、幅6トワーズであつた」。

「これらの寸法に基づいて全体の規模を考えよう。さらに庭園の広さも考えよう。この住宅はローマの執政官のためのものであつたことに注意を払おう。執政官は、これとほぼ同じ広さと同じ豪奢さをもった住宅をほかにもいくつか所有していたのである」。

「サルスティウスの報告するところによって、キケロの所有した住宅を挙げよう。ポンペイの住宅、ルキウス・ルクルスやスッラやほかの多くのローマ人たちの住宅を挙げよう。しかし、これらの記述はそれがいかに興味深いといえども、われわれが扱う対象にとってはそれほど大きな有用性をもたないであろう。これらの記述は、古代人の居住の仕方をわれわれに提供してくれるだけであろう。こうした居住の仕方は、間取りに関していえば、われわれが用いている居住の仕方とは著しく異なっているのである。われわれの風俗は古代人の風俗と同じではないのだし、われわれの生活手段その他もろもろのこともまた、同じではないのである」。

私がここで引用した、この著者による最後の考察は、思うところ、この著者が古代人における間取りの流儀に関して下した判断が、いささか控え目なものであることを示している。この流儀が気候や生活様式や社会慣習や気取りとか虚栄とかいった偏見に密接に結びついているとしたら、また、こうした事態のすべてが国々や時代時代に応じて非常に異なつたものでしかありえないとしたら、この分野における規則を与えたり、積極的な範例を提示したりすることがどうしたらできるかという問題が考えにくくなるのである。

そうなれば、便利のよさというただひとつの点でのみ考えを合致させるほか仕方がないのである。この利便のよさはおそらく間取りの基盤と考えるべきものであろう。しかし、利便のよさそのものは、習慣に依存した部分的なものである。習慣は、到るところで異なり、到るところで多様な結果を生みだすはずのものなのである。間取りの術は、フランスとりわけパリにおいてきわめて洗練されているといわれる。しかしだからといって、パリの現代風の間取りをどこでも模倣すべき好例として提示できるわけではない。小さな空間のなかで、内部の豪華さの享受と出入口の利便のよさを増大させる術がパリで洗練されたといっているにすぎないのである。さらには、パリで建物を建てる土地は非常に高くつき、ひとつの住居には階数と同じだけ多くの個々の住宅が含まれているがゆえに、小さな土地をできる限り有効に利用しなければならなかったといっているのである。間取りの術が洗練されたのはまさにこのためなのである。

ダヴィレやロジエやブロンデルやメジエールその他の人々がこの問題について書いたものを読んだあとでは、この分野に確立すべき規則などまったくないことを認めざるをえなくなる。英国の慣例では、イタリアで探求される部屋部屋のひと続き状態はいっさい認められない。また、フランスの間取りの利点を形づくっている、小さな開口部や出入口や隠れ部屋は、ロンドンやローマでは実用的でなく実行にも移されていないようである。

間取りには、礼儀作法と呼びうるひとつの部分がある。これはまた、儀礼用の広間とか社交用の広間などといった慣例上の部屋の数々や大きさや配置を規定するものである。この部分は、人々の風俗によりいっそう従属したものであって、一般的な理論のテーマを形成できないであろう。さらにいえば、この項目でこのテーマについて語ることでできるもののすべては、住戸とか部屋とか小部屋などのような、間取りの術を構成する部分的な項目それぞれに見いだされるのである（これらの項目を見よ）。

間取りの術についての規則を定めるとは言わないまでも、多少なりとも一般的な戒律めいた規範を言い表わすこと、それは、たとえこうした規範をめいめいの国で部分的に使うことがあるにしても、建築家が自らつくりだすその平面において、建て主の個別の考えになお従属していることに変わりはないがゆえに、いっそう困難なことなのである。

個々人の考えや空想に対する寛容さはあるにしても、公共の用途をもった建造物にはすべて、部分的で不可欠な与件というものがあり、これらの与件に間取りを適合させなければならないのである。

以下に、ダヴィレによって示された個人住宅に対する一般的な格率のいくつかを挙げてみよう。これらの格率以上に正統性をもった格率は、ほかにはない。

- 1° 建物は見栄えがよく、便利な入口をもたねばならない。
- 2° 主屋の最良の位置は、前庭と庭園のあいだである。
- 3° 配膳室、厩舎は、住戸の利便が悪くならないような場所に配置すべきである。  
前庭の各側面に配置する翼屋にこれらのものを置くことで、利便の悪さは避けられる。
- 4° これらの翼屋の一方、すなわち配膳室のある翼屋は、食卓ごしらが便利のように、食堂と境を接する玄関に通じていなければならない。
- 5° 各部屋に不整形な形が多くなるのを避けること。細部のいくつかの形を不整形にすることで、重きをなす何らかの部屋に、いっそうの壮大さないしはいっそうの巧みな位置づけがなされるときに限ってこうした不整形が許されるのである。
- 6° 大きな建物において、長くのびたひと続きの連なりをしつらえようとするときには、この連なりのなかに召使用する部屋部屋が現われないようにすべきである。
- 7° 対称性が全体的に遵守されなければならないとはいえ、対置しあう面同士の相関関係がはっきりとしてさえいれば、内部の間取りにおいて対称性を度外視することができる。
- 8° 建物の内部の間取りと外部の装飾とを合致させることは不可欠な規則である。

### 3. ル・カミュ・ド・メジエールの『建築の精華』

前節のカトルメール・ド・カンシーの論考に引用されたニコラ・ル・カミュ・ド・メジエール（1721 - 1793）の『建築の精華』は、1780年に出版され、いわば18世紀の内部空間に対する考え方の集大成を試みたともいえるものである。本稿においては「間取りと装飾」なる章が重要であり、カトルメールの引用もここから採られている。この章の初めの



部分でル・カミュ・ド・メジエールは、前節に引かれたダヴィレの最後の格率と同様な主張をしている<sup>16)</sup>。

しかしかの建造物が外部によって評価されるのであれば、内部がこの外部に応えうるものになるよう努めよう。内部とはまさにわれわれが住んでいるところであり、それゆえにより重要なものである。むしろ外部も劣らず興味深いものであり、外部は……好きか嫌いかの第一印象を呼び起こす。実際のところ、まず最初にわれわれの心を惹いて離さなくするのは、外部である。外部はわれわれに、内部がどんなものか、内部がどんな用途をもっているかを指し示すはずである。……内部と外部は、このうえなく緊密な連関をもっていなければならない。対応するだけのものが内部にないのに、外部にあまりの壮麗さを付与することは、本質的な欠陥であろう。

ここでは、前節でのべた内外の合致の問題が大前提として掲げられている。ル・カミュ・ド・メジエールはこのあとカトルメール・ド・カンシーが引用した文章を書きつらね、さらにそのあと、古代を評価するカトルメール・ド・カンシーの立場とは違って、現代の住居を高く評価する文章を続ける。ほかならぬフランス人の住居を称賛するのである<sup>17)</sup>。

フランス人のみが逸楽の念に導かれ、過剰なまでに生活の安楽を洗練させた。野心に育まれ、壮麗さに鼓舞されたフランス人は、奢侈の祭壇に貢ぎ物を捧げたのだ。創意に富んでいるがゆえに、フランス人はあらゆるものを有用なものに変える。ささいな事にも気を配り、これを楽しむ。やがてそれを重要なものと見なし、次には有用なものにした。……そしてかつては役に立つだけであったものが不可欠のものとなった。フランス人は外見の大きさに魅了されない。フランス人は自らの関心を融和させ、自らの目標を追い求める。……聡明なるフランス人たちよ！ われわれの世紀は、あなたがたの才能の広がりや光り輝くのを驚嘆の念をもって目にするのだ。感受性の鋭い者は、あなたがたが発明した巧みな間取りを賞嘆する。この巧みな間取りこそは、あなたがたが建築においてなしえた進歩なのである。

このようにル・カミュ・ド・メジエールは、フランス内外で広く評価されてきた、フランスの洗練された間取りを称える。それは、18世紀にルソーなどによって注目されだした感受性の鋭い者(l'homme sensible)が住むのにふさわしい、洗練された生活の場としての住居の根幹をなすものであった。ここにわれわれは、体面重視の家屋の造りから実用性重視の家屋の造りへ、さらには感受性豊かな新しい人間に適合した家屋の造りへ、といった住居観の変遷の跡を見ることができるのである。ル・カミュ・ド・メジエールのこの著作は、建造物の性格を感性論的に論じた画期的なものであったが<sup>18)</sup>、それと同じ精神によって住居の間取りを考察した点でも、きわめて重要な建築書であるといえよう。

## 結。——社会的要素としての間取り——

間取りの概念は、18世紀のフランスにおいて飛躍的に発展した。その中心的な存在であったジャック＝フランソワ・ブロンデルは、ウィトルウィウスの強・用・美にならった建造・間取り・装飾の三幅対を建築理論の中心に据え、とりわけ用に相当する間取りをフランス建築の進展の決定的な要素と位置づけた。これによって旧来の「威信価値」重視の建造物は、新しい「実用価値」重視の建造物へと変身してゆくのであった。これに加えて「感受性(sensibilité)」というもうひとつの価値を重視する建造物が意図されてもくるのである。建築は時代を映しだす鏡のごとき存在である。また、カトルメール・ド・カンシーもいうように、時代のみならず、さまざまな国の風俗、生活様式、慣習をも映しだす

ものでもある。そうした建築のなかにあつて、間取りという概念は、ファサードの様式などに較べて、比較的近代に属するものといえよう。それは、今まで単なる時代の流行の成果として規定されてきた外形（コンフィギュレーション）研究中心の建築史から、社会的要素としての内部空間を中心として考察する新しい建築史への道を拓く、鍵概念にほかならないであろう。

## 注

- 1) 白井秀和編『ルドゥー「建築論」註解Ⅰ』中央公論美術出版 1993, p.96参照。
- 2) ジャック＝フランソワ・ブロンデル (Jacques-François Blondel 1705-1774) については、白井秀和訳『ブロンデル「建築序説」』中央公論美術出版 1990 が詳しい。
- 3) G. Boffrand, *Livres d'architecture*, Paris 1745. 利便のよさは *commodité*, くつろぎは *aisance*. なお引用は、M. Eleb-Vidal, *Architectures de la vie privée, maisons et mentalités, XVIIe-XIXe siècles*, Bruxelles 1989, p. 45 による。
- 4) Ch. E. Briseux, *L'Architecture moderne ou l'art de bien bâtir pour toutes sortes de personnes*, Paris 1728. なお正確には、この書の著者はブリズーではなくティエルスレである。1764年に Ch. A. Jombert による注釈付きの第二版が出版された。
- 5) M. Eleb-Vidal, *op. cit.*, p. 45 「」内は前注の Jombertの著作からの引用。
- 6) N. エリアス『宮廷社会』波田節夫他訳, 法政大学出版局 1981, pp. 82-83
- 7) J. Guadet, *L'Architecture française* に付した序文。引用は Eleb-Vidal, *op. cit.*, p. 40より。
- 8) 前掲『ブロンデル「建築序説」』, p. 44
- 9) Nicolas Le Camus de Mézières: *The Genius of Architecture, or the Analogy of that art with our Sensation*, Chicago 1992 所収のロビン・ミドルトンによる解説序文 p. 39. Peter Thornton, *Authentic Decor, the Domestic Interior 1620-1920*, London 1984, pp. 139, 145. アダムはその『建築作品集』(1773-79)の第一巻で、フランス人が住戸 (*appartement, apartment*) の間取りで他の国民に勝っていると述べた。アダムはまたブロンデルの著作に大きな影響を受けていた。なお、同時代のイタリア人建築家ジャコモ・クワレンギ(1744-1817)もフランス建築における間取りの卓越性を称賛していた (Thornton, *op. cit.*, p. 139)。
- 10) 閨房とは女主人が私的に安らう部屋のこと。
- 11) 前掲『ルドゥー「建築論」註解Ⅰ』p. 8
- 12) 同書同頁。
- 13) Eleb-Vidal, *op. cit.*, p. 43. なおダヴィレ、ル・ヴィルロワからの引用は、同書 p. 296 による。ダヴィレの1710年版は、セバステイアン・ル・ブロンによって改定を施されて出版された (Thornton, *op. cit.*, p. 50)。この他に、1725年にもジャン・クールトヌが遠近法に関する著作のなかで、フランス人が間取りの術を他の国民よりはるかに進歩せしめたと述べていた (*Ibid.*)。
- 14) Eleb-Vidal, *op. cit.*, p. 43

- 15) A.Ch.Quatremère de Quincy, Encyclopédie méthodique. Architecture, tome II, Paris 1801, pp. 221-223. 同じ文章が第二版ともいえる Dictionnaire historique d'architecture, tome I, Paris 1832, pp. 530-532 に転載されている。またカトルメールは『分野別百科全書・建築』の第一巻(1788)の「利便のよさ commodités」の項目において、次のように述べている。「よい間取りが施されるとき、いくつもの小部屋とか小さな出入用の部屋があるとき、とりわけ、われわれの慣用に適合しているとき、住戸にあらゆる種類の利便のよさが備わっているといわれる」(p.17)。
- 16) Nicolas Le Camus de Mézières, Le Génie de l'Architecture ou l'analogie de cet art avec nos sensations, Paris 1780, p. 80
- 17) Ibid., p. 81
- 18) 白井秀和「フランス啓蒙主義建築思潮における性格の問題」、『日本建築学会論文報告集』第330号(1983.8) 所収、参照。

